



四季

3月増刊号（卒業式・修了式）

～四中の季節～

- 教育目標
- 自分で考え進んで実践する人間
 - 公共心に富み情操豊かな人間
 - 勤労を尊び責任を重んじる人間
 - 健康でたくましい人間

令和5年3月24日発行
校長 関 勝 志
〒187-0045
小平市学園西町1-3-1
☎ 042 (341) 4344
Email gakkou@34.kodaira.ed.jp

令和四年度 第五十七回卒業式 校長式辞（抜粋）

校長 関 勝 志

青空の下での入学式から三年が経とうとしています。皆さんの中学校生活は、予想もしない臨時休校で始まりました。六月になり、ようやく登校できるようになりましたが、思い描いていたものとはかけ離れていたことと思います。行事がことごとく中止となり、全校生徒で取り組む活動はできませんでした。そんな中でも、学年別や代替えの行事を企画し、仲間と共に過ごす限られた時間を大切にしながら、精一杯楽しみました。学習にもひたむきに取り組み、着実に力を伸ばしました。そんな皆さんの姿から感じたことは、「素直」と「謙虚」でした。

三年生になると少しずつ通常の活動ができるようになりました。しかし、二年間の長いトンネルを抜けると、そこには道がありませんでした。全校で実施する運動会も、合唱コンクールも、先輩たちがつくってくれた道はもう見えませんでした。「自分たちで道を切り拓かなければならない」という大きな壁に直面しました。でも、皆さんは立派にやり遂げました。新しい道を切り拓き、小平四中の新たな時代を築きました。念願の修学旅行では、はち切れんばかりの笑顔で思いっきり楽しんでいました。そんな皆さんがどんな場面でも大切にしていたこと、それは「感謝」の気持ちでした。我慢の二年間があったからこそなのかもしれません。

皆さんは、松下幸之助という人物を知っているでしょう。パナソニックの創業者で、「経営の神様」と称されるほどの偉大な人物です。松下幸之助さんは、著書「道をひらく」の中で、素直に謙虚に生きること、そして感謝することの大切さを何度も綴っています。どれも皆さんが中学校生活で培ったものです。

皆さんが歩んできた義務教育九年間の道のりには、様々な学びがあったことと思います。通り過ぎてきた道を振り返る必要はありません。過去の経験はすべて皆さんの中にあります。楽しい経験をした人は、やる気を得ました。悲しい経験をした人は、思いやりの大切さを知りました。目標を達成した人は、自信をつかみました。辛い思いをした人は、耐えて諦めない底力を身に付けました。学校にあまり来ることができなかった人も、自分の道を見つけ前へ進もうと精一杯努力し、人生にしっかりと向き合っていました。

小平四中の道を拓いてくれた皆さんは、今度は自分の道を拓く番です。夢や目標をもち、心の道しるべを信じて、一歩一歩しっかりと歩んでいってください。皆さんに、詩人 相田みつをさんの言葉を贈ります。

「道はじぶんでつくる 道は自分でひらく 人のつくったものはじぶんの道にはならない」

『卒業生を送る言葉』 在校生代表 天野 瑠七

暖かく、心地よい日差しからは春の訪れが感じられます。玉川上水の木々や草花がいきいきとした色合いに染まる季節となりました。

卒業生の皆さん、本日はご卒業おめでとうございます。在校生を代表して心よりお祝い申し上げます。卒業生の皆さんは私たちにとって憧れの存在でした。私たちより多くのことを経験し、この小平四中のリーダーとしてみんなをまとめて引っ張っていく姿はまさに私たちの理想とする姿でした。

二年前に入学した頃、私たちは新しく始まる学校生活に胸を弾ませながらも、それを同じくらいの不安が心の中にありました。そんな時、「中学校生活は楽しいよ」「困ったことがあったらいつでも頼ってね」と言ってくださったのが皆さんです。笑顔で優しく話しかけてくれる皆さんのおかげで私たちは中学校生活を笑顔でスタートすることができました。

今年度の運動会では、皆さんと初めて一緒に行事を行うことができました。行事に一生懸命に取り組む皆さんの姿はいつもよりも一段とカッコよく見えました。「全員リレー」ではクラスで団結し、優勝を目指して最後まで諦めずに走っている姿や、クラスメイトが走っている時に全力で応援している姿に、私たちは感動を覚えました。そして、その姿に影響されるように私たちも運動会に対する気持ちがどんどん強まってきていきました。そうして、皆さんと一緒に行うことができた運動会は私たちにとって大切な思い出になりました。

また、委員会や部活動などの学校生活で私たちより一歩先を歩く皆さんはとても頼もしく、皆さんのようになりたいと思うようになりました。皆さんは私たち困ったとき、行き詰ったときに歩むべき道しるべとなってくれました。そんな皆さんと中学校生活の二年間を共に歩んでこられたことを誇りに思います。ここで会えるのが今日で最後だと思うと、とても寂しいです。ですが、今度は私たちがこの小平四中のリーダーとなり、みんなを引っ張っていく番です。皆さんが私たちの憧れの存在であったように私たちも、後輩のみんなの憧れの存在になれるように頑張っていきます。そして、皆さんが創り上げた文化や伝統をこれからも守り継ぎ、この小平四中を今よりもっと魅力あふれる学校にしていけるように励んでいきます。

皆さんには、新しく始まる未来に向かって自信をもってまっすぐに進んでいってほしいです。皆さんのそれぞれ選んだ道が笑顔と希望で満ちあふれていますようにと願っています。皆さんならきっと、どんな困難があっても道を切り拓いて力強く歩まれていくと信じています。

『私たちの三年間』 卒業生代表 広富 晴貴

私たちの入学式は青い空のもと、桜が咲き誇る中で行われました。しかし、私たちの目に映る桜や空、この四中は決して鮮やかではありませんでした。入学式からすぐに二カ月間の休校、さらに学校が始まって分散登校と、全員が顔を合わせるまでには時間がかかりました。それでも学校が始まるとすぐに他の小学校の人とも仲良くなりました。最初の頃は休み時間になっても誰一人、席を立たずとても静かだった教室。しかしそれもすぐに、話し声のあふれる活気のある教室へと変わりました。それでもコロナウイルスの影響で運動会、合唱コンクール、川越移動教室、スキー教室などの行事はなくなりました。さらに部活動にも多くの制限があり、たびたび活動自粛になったり、試合がなくなったり。先輩の活躍する姿はほとんど見ることはできませんでした。もっと先輩方を見つめていたかった、そんな後悔もありました。

二年生になると、運動会や合唱コンクールなどの行事が規模を小さくして戻ってきました。一年生の時はできなかった分、少しでもできるようになったときは、嬉しく感じました。初めての運動会は学年別開催となり、他学年の競技は見ることはできませんでした。運動会ができて嬉しい気持ちの反面、他学年の競技が見られず、悲しい気持ちが混ざり、複雑な気持ちになりました。それでも実施できることに感謝しながら、優勝しようと自分たちの競技に全力で取り組みました。全員リレーでは、練習であまり順位が良くないとイライラして雰囲気が悪くなることもありました。そのような状態でも、その後は必ずクラスで良くなかったところを探し練習しました。そのおかげで規模は小さいながらもみんなが全力を尽くす運動会を作り上げることができました。

しかし、戻ってきた行事もあれば、中止になった行事もあります。一年生から延期されたスキー教室は二学期から着々と準備を進めていたものの、本番間近のところまで中止になりました。その頃はコロナウイルスの感染者も増えていてスキー教室を心のどこかであきらめていたのかもしれませんが。それに加えて、行事が中止されることに慣れてしまっていた私たちは、中止を聞かされてもどこか納得していました。ですが時間が経つにつれて「悔しい」という思いがどんどん膨らんでいきました。

ようやく実施された三年生の修学旅行。炎天下の中、マスクをつけながら回るのはとても大変でした。それでも感染症対策を徹底したことで、誰一人体調不良にならずに無事に終わることができました。スキー教室が中止されたことで、修学旅行も同様に行けなくなるのではないかという心配もありました。当日は無事に実施できるようにしてくれた先生方への感謝と喜びをかみしめて楽しむことができました。

今日この卒業式で僕たち三年生は卒業します。僕たちの中学校生活の三年間は感染症対策でかなり制限され、多くの行事ができなくなりました。しかし、僕たちの学校生活は決してつまらないものではありませんでした。それは残った行事に感謝しながら全力で取り組み、友達と励まし合い、支え合うことができたからです。「瞳を閉じればあなたがまぶたの裏にいることで、どれほど強くなれたでしょう」。これまでのように、これからも中学校の友人を思い出し、つらいことも乗り越えていきたいと思えます。

『先生へ』 卒業生代表 豊富 紬

私たちが中学校生活を送った三年間、コロナウイルスの収束は見えることがありませんでした。そんな三年間でも悲しい思い出ばかりではありません。むしろ楽しい思い出がたくさん蘇ってきます。こうして振り返ると、私たちは「先生」という大きな存在に支えられてきたのだと気がつきます。学級内ではマスク越しに笑顔があふれ、中止になった行事には必ず代替行事が用意されていました。部活では部員がまとまらなかったり、意見の食い違いから衝突したりもしました。そんなときはいつも顧問の先生が助けてくれました。これらのことは全て私たちにとって当たり前のことでした。でもこの当たり前の裏で、先生たちはたくさん考えて、悩んで、努力してくれていました。今までの当たり前は、当たり前ではなかったのだと今になって実感します。

分からないことだらけだった受験も、担任の先生をはじめとする多くの先生たちのお世話になりました。特に担任の先生はそれぞれの進路について丁寧に考えてくれました。先生が持っていた資料にはたくさんの付箋が貼ってあり、一人一人の進路に寄り添ってくれているのを感じました。私は何かある度、担任の先生にたくさん話を聞いてもらいました。そのおかげで自分に合った進路選択ができました。また、多くの先生が私たちをたくさん応援してくれました。「良く頑張っているね」「応援しているよ」と声をかけてもらい、その期待に応えようと勉強に励むことができました。進路が決まり、「良かったね」と笑顔で言ってもらえたとき、喜びと感謝で胸がいっぱいになりました。

そんな先生たちの生徒への思いを強く感じた出来事がありました。それは昨年度スキー教室が中止になったことのことです。私たちはホールに集められ、校長先生から中止になったことを聞きました。その時一番肩を落として、悲しんでいたのは先生たちでした。その顔を見て、スキー教室に行けない悲しみは先生も生徒も同じなのだ気がつきました。そして、先生たちが私たちのことをたくさん考えてくれていたのだと実感しました。この三年間、感染症の拡大に私たちは戸惑い続けました。私たちが十五年生きてきた中で初めてのことでした。でもそれは先生たちにとっても初めての事態だったと思います。誰にも何も分からない状態でした。正解もない、前例もない、そんな中でたくさんのことを考えてくれました。先生たちは生徒に楽しい学校生活を送ってほしい。けれど感染してほしくない。そんな思いを抱いてきた三年間だったと思います。私たちも同じでした。行事をしたり、みんなで話しながら給食を食べたり、マスクを取って笑い合ったり…。そういう当たり前のことがしたい。それでもコロナにかかるのが怖い。誰かに迷惑をかけたくない。そんな今まで感じたことのないもどかしさを感じてきました。

それでも私たちはとっても楽しかったです。コロナ禍でも中学校生活を送れて幸せでした。楽しい授業をしてくれた先生。部活を最後まで支えてくれた先生。委員会でアドバイスをくれた先生。趣味の話につきあってくれた先生。努力を認めてくれた先生。夢を応援してくれた先生。そして私たちを支えてくださった四中の全ての職員のみなさん。みなさんが小平四中にいてくださって私は嬉しいです。私たちが卒業しても「あの学年はコロナ禍でも良くがんばっていたんだよ」と、自慢気に語ってもらえるような学年になれていたら嬉しいです。私たちの三年間を支えてくれてありがとうございました。

『友へ』 卒業生代表 望月 祐雲

私たちはこの三年間を先生や周りの大人たちに支えられ、過ごすことができました。そしてそれと同時に、この三年間はかけがえのない友、仲間と共に歩んできた三年でもありました。今思えば仲間がいたからこそ先の見えない不安を拭うことができた、成長することができたのだと実感します。

私たちの中学校生活にはいつも不安の影が張り付いていました。多くの行事が延期や中止、規模縮小に追い込まれました。その度にみんな溜め息をつき落胆の声を上げました。例年のような中学校生活はいつになったら送れるのかという不安がつのるばかりでした。ですが、そんな時でも私たちには励まし合える友がいました。

私たちは数少ない行事を一つ、また一つと乗り越える度に友情を育んできました。学級で一丸となり、一つのことに取り組んだ日々は今も昨日のこのように思い出されます。特に修学旅行は私たちにとって最初で最後の宿泊行事でした。修学旅行は今まで一番長く仲間と過ごした三日間でした。その分、今までになく自分たちをさらけだして友と接することができました。その結果、より深い友情、そして学級としてのまとまりある雰囲気構築されていきました。

そんな深い友情や学級の雰囲気に私たちはどれほど助けられたことでしょうか。朝、どんなに学校が億劫でも、どんなに気分が沈んでいても、クラスに身を置くだけで朝のことなんて忘れることができました。受験のこと先のアナウンスもすべて、友といるときは心の片隅に追いやることができました。だからこそ、私たちは団体戦として受験と戦うことができたと感じます。

私たちが助けられたのは学級だけではありません。特に生徒会や部活動では友の偉大さを感じさせられるばかりでした。一人でできることなど高が知れています。だからこそ、友の協力は不可欠でした。どんなに自分では一人ががんばっていると思っていても、実際は支えてくれる友が必要でした。もちろん友と衝突することもありました。ですが、友がいて衝突したからこそ成功に近づけたと思います。友が一人でも欠けていたら為しえなかったことは数多くあります。行事や生徒会、部活動のいずれも、友がいたから出来たものでした。そして学年を問わず、友というのは時に頼れる仲間であり、時にライバルでもありました。部活動のみならず、勉強においても互いにしのぎを削りました。あの人がいるからもっとがんばろう。この集団のためにがんばろう。そう思えました。友と切磋琢磨し、友のために行動し、高みを目指してきました。

私たちは決して多くの時間を先輩と共有することはできませんでした。だから先輩になったときは不安でした。一、二年生の皆さん、私たちはちゃんと先輩らしいことは出来たでしょうか。先輩として情けないところもあったかもしれません。ですが、皆さんが委員会や部活動などこの四中を立派に動かしていく姿を見て本当に誇らしいです。どうかこれからの四中をよろしくお願いします。

そして三年生。私たちがこうして一同に会することはもう二度とないかもしれません。しかし、私たちが友として今まで築いてきた友情や、支え合い共に成長してきた三年間は決して変わりません。改めて振り返れば制限こそ多かったものの、友と過ごした時間は実に楽しいものばかりです。中学校三年間をこの二〇三人で過ごせて本当に良かった。心からそう思います。今までありがとう。

『家族へ、そして旅立ち』 卒業生代表 倉本 心美

そして多くの人々が初めて先の見えない大きな壁にぶつかり、悩んだ受験。勉強を進めていく中でも、このままでいいのかと立ち止まり、時にはそんな自分を責めてしまうこともありました。「受験は団体戦」、先生方が良くおっしゃっていたこの言葉。三年生になってまだ間もない頃は、受験は一人一人の戦いであって、周り協力して成し遂げられるものではないと思っていました。しかし、本格的に受験を目の前にして団体戦であることを強く実感しました。休み時間も必死にがんばっている仲間の姿を見て刺激をもらったり、近くで応援してくれたり、励まし合ったり、友の存在があってこそ、最後まであきらめず努力を続けることが出来ました。各クラス・学年が一丸となって臨んだ受験は、私たちにとって価値のある集大成となりました。

そんな中でも周り比べてしまう自分がいたり、思うように成績がついてこなくて孤独を感じることもありました。そんな時に一番近くで支えてくれたのが家族でした。私の意見を尊重してくれ、常に一番に考えてくれました。毎日温かいご飯を用意してくれて、話を聞いてくれて、振り返ってみると恵まれた環境で受験というものに立ち向かえたと思います。しかし、仕事や家事、色々なことで忙しかったのに、環境に甘えてしまったり、迷惑をかけてしまったことを反省しています。多くのことを自分で考え、行動しなければいけない私たちですが、上手いかななかったり、誰かに頼りたくなることもありました。そんな大人と子どもの間をさまよっている私たちを温かく支え、見守ってくれてありがとうございました。義務教育卒業後の第一歩となる道と一緒に考えてくれたのだから、私たちはその道を精一杯の力で歩んでいきます。改めてお父さん、お母さん、保護者の皆さんありがとう

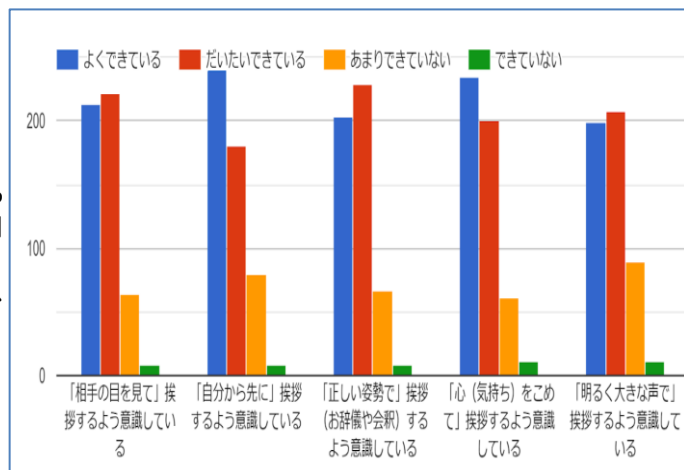
そして長いようで短かった受験を経て、自分の望む進路に進めた人、惜しくも悔しい結果になってしまった人もいます。努力は必ず報われるわけではないのかもしれませんが、しかし、一つ言えるのはその目標に向かって試行錯誤しながらも努力してきた過程は必ず力になるし、私たちを大きく成長させてくれます。私自身友達をうらやましく思ったりすることもありました。でも重要なのはどの道を歩くかではなく、その道をどのように歩いていくかです。私たちはこの三年間、苦しくて悲しくて辛い思いをたくさんしてきました。中学校生活で何をやるにも「制限」というものがついてきて、自由に身動きがとれませんでした。でも私たち三年生はどんな逆境にも負けることなく、仲間と共に駆け抜けてきました。私たちが負けることはありません。立ち止まることもありません。コロナ禍ということもあり、今でも先が見えなかったり、不安になることもあります。でも私たちの未来はきっと明るいです。そして多くのことを乗り越えてきた私たちに、越えられない壁はありません。

しかし、壁を越えられたのは様々な方の支えがあったからです。先生方、四中の職員のみなさん、地域のみなさん、友達、家族、この三年間、手を差し伸べてくれてありがとうございました。感謝の気持ちを胸にそれぞれの進む進路で花を咲かせましょう。

■ 気持ちのいい挨拶（自己評価） ■

「気持ちのいい挨拶」の自己評価を行いました。肯定的な評価をした生徒は84%で、7月から4ポイント上がりました。特に2年生は、69.1%から80.3%へ大きな変容が見られ、最上級生になる自覚がうかがえます。項目別にみると、「相手の目を見て」85.6%、「自分から先に」82.9%、「正しい姿勢で」85.2%、「心を込めて」85.9%、「明るく大きな声で」80.2%でした。

自由意見には、つながり、コミュニケーション、礼儀、リスペクト、気持ちいい、笑顔、常識など、多くの方が挨拶の大切さを挙げていましたが、苦手や面倒くさいなどの正直な意見もありました。また、先生たちの挨拶についても改善点の指摘がありました。生徒の見本となるよう頑張りたいと思います。



以下は自由意見です。

- 挨拶は、人と関わる上でとても重要なことだと思っています。これからも先生や先輩などに明るく大きな声できちんとあいさつをしていきたいです。また、地域の人にも積極的にあいさつをしていきたいです。
- 初めて会う人が感じるその人の印象は挨拶でだいたい決まると思うので、しっかりと挨拶をするのがいいと思う。相手の体の調子や気分もわかるので相手を配慮するべきときに助かる。
- 挨拶には無限の可能性があるとと思っています。一つの挨拶がきっかけで新しい友達ができたり、他国の挨拶を覚えることで外国の方とも仲良くできたりするなど、たくさんの可能性があるからです。
- 僕は元々挨拶が嫌いでしたが、四中に入って馴染みの無い人たちと話すときに、まず挨拶からして仲良くなったので、いまではとても重要だと思っています
- 私は、人の目を見るということが苦手で、人の目を見てはきはきと挨拶できる人を尊敬しています。そういう人になりたいです。
- 挨拶は、たとえ知らない人や関わりの薄い人とでも、新しい関係を築くためのきっかけになったり、その人と繋がることできたりするのでとても大切だと思います。これからも積極的に挨拶をしていきたいです。
- 挨拶は、他人の心と自分の心をつなげる手段の一つだと思っているから、一人ひとりが気持ちの良い挨拶を心がけることが大切だと思っている。
- 個人の社会性を向上させる上でとても重要な行いかなと思います。会釈でもなんでも良いので挨拶をされたら何かしらの反応はするべきだと思います。

■ 「心」の交流セレモニー ■

3月15日（水）、1・2年生から3年生へ卒業を祝うメッセージを渡すセレモニーが行われました。この日は卒業式予行が実施され、全校生徒が一堂に会する最後の日でした。「この日に在校生から3年生に何かできないか」と、1月の第2学年の学級委員会の中で提案があり、話し合う中で1・2年生から3年生にメッセージを送ろうという話になりました。中央委員会で第2学年の学級委員から第1学年の学級委員にも提案し、クラスごとに準備を始めました。

セレモニー当日は、1・2年生からお祝いと感謝の気持ちを代表生徒が伝え、3年生へメッセージを渡しました。3年生からもお礼の言葉と、1・2年生へのメッセージが渡されました。お互いの気持ちを交換し合うことができ、バトンがしっかり引き継がれました。温かい心が通い合う、とても心地よい時間でした。

行事や日々の活動等を通して、クラス、学年の団結力を高めてきましたが、卒業式予行や交流セレモニーを通して、3つの学年全体が一つになり、学校全体で一体感を感じる素晴らしい時間を過ごすことができたのではないかと思います。



■ 生徒の活躍 ■

第72回東京都公立学校美術展覧会（都展） 書写
1F 加藤 里奈 さん / 2D 佐久間 歩都 さん

【小平市教育委員会表彰】小平市教育委員会

3E 高崎 颯太 さん（第49回 全日本中学校陸上競技選手権大会）
3C 橋本 鷹之介 さん（2022 全日本アマチュア・スケートボード選手権）
1D 小熊 健祐 さん（第60回全国中学校スキー大会）

【体育優良生徒】東京都体育協会・東京都中学校体育連盟

3D 川手 翔仁 さん / 3C 倉本 心美 さん

